

東洋大学学術情報リポジトリ Toyo University Repository for Academic Resources

半井本『保元物語』における「首」の訓一考 古辞書と軍記作品の訓をめぐって

| | |
|-----|---|
| 著者 | 池原 陽斉 |
| 雑誌名 | 日本文学文化 |
| 号 | 10 |
| ページ | 53-65 |
| 発行年 | 2010 |
| URL | http://id.nii.ac.jp/1060/00006332/ |



半井本『保元物語』における「首」の訓一考

——古辞書と軍記作品の訓をめぐる——

池 原 陽 斉

はじめに

平安時代の古記録の讀法研究に、中古・中世の古辞書が有益であることは言をまたない」とは、峰岸明『平安時代古記録の國語學的研究』によせられた中田祝夫の序のなかの一節である。そして、この言は古記録のみではなくひろく古典一般に、とりわけ漢字が多用される文献全般——峰岸氏の用語をかりれば「漢字表記語」を使用して書記した文献——にも、そのまま援用できるものとおもう。

それは、たとえば日本古典文学大系などの古典叢書の頭注などを鳥瞰していれば、非常におおくの古辞書が引用されていることよって証せられる。古典作品に使用される漢字をどのように訓むかという問題について、古辞書は基本文献の役割をはたしていると考えていいだろう。

その意義は、たとえば『今昔物語集』、延慶本『平家物語』、そして本稿が主たる対象としてあつかう半井本『保元

物語』など、附訓のない、あるいはほとんどない和漢混淆文の作品である場合には、非常におおきなものとなる。これらの文献を正確に訓読しようとする場合、古辞書を埒外におくことは不可能といっている。

同時に、古辞書に登載されることばにもかぎりがあり、作品の読解に際して適切な用例をえられない場合もおおい。稿者は先だって、『半井本保元物語 本文・校異・訓釈編』（以下『本文』と略す）の編集にかかわって、当該作品について、作中の「漢字表記語」を調査する機会をえたので、そこからいくばくかの例を抽出する。

たとえば、

例ノ崎細ノ矢ヲ指食セテ、打傾テ雲透ニミレバ、只一矢

二内甲射テ射落サント云々（中巻十四丁ウ五）

という文中にみえる「雲透」という語は、調査した範囲の古辞書にはまったく登載されていない。この語について、『新大系』は「くもすき」と清音に訓むが、金刀比羅本『平治物

語」の附訓に「くもずき」と濁音の例があるので、『本文』ではこちらをとった。

あるいは、つぎのような場合もある。

カネ巻二漆一ハケ、夜部指タルガ、能モヒヌニ、手前六寸、口六寸、ヤイバ八寸、大カリマタヲネデスゲテ云々

(中巻十九ウ七)

傍線部を『新大系』は「ヨベ」と訓み、ほかに訓を想定することはむずかしいから、それでいいだろう。

しかし古辞書では、『色葉字類抄』(前田本・黒川本)には「宿」「冥」「昔夕」、『書言字考節用集』には「宿」「昨夕」「夜辺」とあって、『半井本』の表記である「夜部」はない。古辞書の表記はいずれも義訓であるが、「夜部」の「部」は音によるあて字であり、訓の性格がこととなっている。

この「夜部」というあて字表記は、古記録にみえるもので、「戊戌。夜部より雨下る(戊戌。從夜部雨下)」(『御堂関白記』長和二(二〇一三)年正月六日条)など、多数の例がある。『半井本』には、ほかに「本鳥」(モトドリ)、「先立」(サキダツ)など、古辞書に例がない、あるいはとぼしいあて字表記がすくなくない。これらは古記録などの実用文の表記をまなんだものかもしれない。

ほかにも、古辞書と古記録、また『半井本』以外の物語作品との対応を考えていくと興味ぶかい例は散見する。しかし

ここでは、古辞書は和漢混淆文を訓読する際のもっとも基本的な資料ではあるが、それだけによつては正確な訓をうることはできないということを確認するにとどめたい。

—

さて、本稿で主として調査対象としてとりあげるのは、『半井本』における漢字「首」についてである。平凡な漢字であるが、その割にというか、そうであるからこそ、あつかい厄介なものである。

現在の日常的な表記だと、「首」の訓よみは「クビ」であり、それ以外は考えがたい。しかし古辞書を鳥瞰すると、この現行の表記意識が、『半井本』があられたと目される十三世紀前半には成立していないことに気づかされる。

すなわち、『類聚名義抄』で「首」という漢字にあたると、「カウベ」「ハジム」「カシラ」「ムカフ」(以上、蓮成院本・観智院本)、「ス・ム」「オモムク」「アラハル」「フス」(以上、観智院本)と八種の訓が登載されているが、「クビ」はみあたらない。『色葉字類抄』(前田本・黒川本)でも、「カウヘ」はあるが「クビ」はなく、平安末期の代表的な古辞書二種において、「首」と「クビ」とは対応していない。

「首」に「クビ」の訓をあてる古辞書としては、室町にはいつて、文明六(一四七四)年刊の『文明本節用集』がはや

いが、これは「頸」「頂」の割注として「又俗作」首（二五四頁）とある例であるから、「首」と「クビ」の関係が常態でなかったことがかえってしられる。

つまり院政期、鎌倉初期の古辞書において「首」は「クビ」とはよまず、逆に「クビ」の正訓字とみとめられるのは、『文明本』にもみえた「頸」である。『類聚名義抄』（観智院本）、『色葉字類抄』（黒川本）、では「頸」を「クビ」と訓む。また『訓点語彙集成』をあたっても八世紀末の『華嚴經音義私記』以来、一貫して「クビ」ないしは「ミクビ」と訓まれ異例がない。あるいは、龍谷大学蔵本『平家物語』にも、「頸」は百四十ほどの使用例があるが、附訓のあるかぎり「クビ」と訓まれ、まったく乱れがない。

あるいは漢字文献のごくふるい例として、『萬葉集』でも、我が恋は千引きの石を七ばかり頸二將繫母神のまにまに（巻四・七四三・大伴家持）

の第四句に「頸」の例があるが、『校本萬葉集』に「クビ」以外の、ひとつの異訓もない。

つまり、「頸」と「クビ」の対応の度合いは非常につよく、「首」のはいりこむ余地は全然なさそうである。『半井本』にも「頸」は三十一例あるが、これらはすべて「クビ」と訓んであやまらないだろう。

問題は「首」である。『半井本』成立に年代がちな古

辞書の傾向からすれば、「カウベ」がもつとも素直な訓ということになるが、「夜部」や「本鳥」がそうであったように、古辞書の未収録が、そのまま「首」と「クビ」とに縁がないことをしめすわけではない。

あるいは、「頸」とおなじように古辞書のそとにまで搜索範囲をひろげれば、『訓点語彙集成別巻漢字索引』では十九種もの「首」の訓があり、そのなかには、希少ではあるが「クビ」もある。あるいは『中華若木詩抄』あたりになると「首」は「クビ」と訓むのが常態で、古辞書の例がとほしいだけということになる。

また、龍谷大学蔵本『平家物語』を例にとれば、「首」を「カウベ」と訓むのはわずかに四例であるのに対して、「クビ」は十七例あり、後者が圧倒的におおく、古辞書の傾向とは一致していない。

すると『半井本』に二十三例ある「首」表記はいつたどのように訓めばいいのかという問題は、依然として解決できない。おなじ和漢混淆文で、軍記物語でもある『平家』の例を尊重するならば、古辞書にさからって「クビ」と訓みたいところであるが、ことはそう単純でもない。

それは金刀比羅本『保元物語』のように、「頸」を「クビ」と訓むものが三十九例、かな表記が四例であるのに対して、「首」は「カウベ」と訓むものが七例、かな表記一例と、

完全に「頸」と「首」が使い分けられている文献もあるからである。

こちらにしたがうならば、「首」はすべて「カウベ」と訓むことになるだろう。

『新大系』では「首」のおおくに附訓しないが、このような措置となつたのも、右のような事情を考慮すればやむをえないことではなかつたかとおもう。『本文』でも基本的に「首」は「カウベ」と訓んで、「クビ」を空見出しとするという便宜的な対応をしたが、これも漢字と訓との関係が一对一では割りきれないという判断をしたためである。

龍谷『平家』と金本『保元』の二書を例にとつてみただけでも、附訓の傾向がことなることは明白である。この事實は執筆者、筆録者の判断によつて、「首」に対する附訓意識がことなる——固定できる正訓字といえるものがない——ということをしめしており、無訓本である『平井本』の場合、「首」をなんと訓むかという問題は、漢字表記の面からは結論をくだすことができない。

すると、古辞書のレベル、つまりは特定の単語・熟語に対する附訓というレベルをこえた、文による把握が必要になるとおもう。

さて、訓決定の方法として、『平井本』にみえる「首」がどのような活用語と対応しているのかをおさえ、それと表記の明文な文献とを照合してみたい。

つまり附訓文献であれば、「クビ」、あるいは「カウベ」がどのような活用語と対応しているのかを明確に指摘することができると、それを根拠として、無訓本である『平井本』の訓みも決定できると考える。

『平井本』に「クビ」ないしは「カウベ」と訓む「首」は二十三例あり、以下のように弁別できる。

- ・首ヲ地ニ附(ク)——中三十六丁ウ四
- ・首ヲ刎(ヌ)——下十オ一、ウ五、ウ九、三十六オ九(×)
- 二、三十九オ一
- ・首ヲ討(ツ)——下十六オ二
- ・首ハ【土ニソ】落(ツ)——下十六オ五
- ・首ヲ実検(ス)——下十六オ七
- ・首ヲ切(ル)——下十六オ八、十七オ四、オ六、十八オ八、三十五ウ九(×二) 四十二オ一、四十三ウ三
- ・首ヲ懸(ク)——下十六オ八
- ・首モ無(シ)——下二十二ウ三、ウ五
- ・首ヲ持(ツ)——下二十三オ九
- ・首ヲ都へ奉(ル)——下四十九オ四

対応する活用語をアイウエオ順にならべると、「討ツ」「落ツ」「懸ク」「切ル」「実檢ス」「（都に）奉ル」「附ク」「無シ」「勿ヌ」「持ツ」「渡ス」と十一種あり、それぞれになんと訓むのが問題となる。

そこで、つぎに軍記物語から、附訓本、ないしはかな表記、ローマ字表記の作品をえらび、「クビ」「カウベ」にそれぞれ対応している活用語を掲出する。具体的には、龍谷本、天草版二種の『平家』、金本『保元』、同『平治』^{（三十一）}、土井本『太平記』^{（三十二）}の五種の文献を利用する。

軍記物語に調査の範囲を限定したのは、『半井本』とおなじジャンルだからということもあるが、それ以上に合戦の場面が豊富なこれらの作品であれば、物騒な話ではあるが、「クビ」「カウベ」の用例が相当数あることが期待でき、ひいてはそれと対応する活用語についても、それなりの数量をみこめると考えたからである。

さきに、唯一の形容詞との対応例である「首モ無シ」について用例の傾向を掲出しておくことで、以下の方法についての確認にかえたい。

すなわち、龍谷『平家』と土井『太平記』をみると、前者には「クビモナシ」が一例あるのに対して、「カウベモナシ」

という例はひとつもなく、後者でも「クビハナシ」「クビモナシ」と一例ずつあるが、「カウベ」と「ナシ」がむすびついた例は、やはりひとつもない。

しかし、そもその問題でいえば、以下に総数を掲出したように、龍谷『平家』では七倍ほど、土井『太平記』では五倍ほど「クビ」は「カウベ」よりも数量がおおく、「クビ」が普遍性のたかい語であるということができる。

だから、それぞれ一例と二例という数字でもって、「クビモナシ」に確定できるのかどうかには、疑問がないでもない。しかし、ある程度の数量をもつ「カウベ」にひとつの例もないことも事実であって、択一的に考えれば、「クビ」と対応しているとみていいだろう。すくなくとも、そのようにみるのが穏当だともう。

「ナシ」について以上のとおりであるので、以下では動詞との対応をみていくことになる。なお、挙例は動詞のアイウエオ順により、終止形で掲出するとともに、複合動詞は基本となる動詞のもとに帰属させた。また、一文献内で「クビ」「カウベ」の両方と対応する動詞については、双方に傍線を附して所在を明確にした。

龍谷『平家』・「クビ」^{（三十四）}（総数百三十四例）

●あたふ（与）一例、●いだく（抱）一例、●いる（入）

一例、●うけとる(受取)一例、●うつ(打、「うちおとす」含)八例、●おさむ(納)一例、●おつ(落)二例、●かく(懸)二十例、●かす(貸)一例、●きる(切、「かききる」「ねぢきる」含)二十四例、●げんざんにいる(見参)二例、●こふ(乞)一例、●さしあぐ(差上)一例、●実検す・三例、●損ず・一例、●たづねいづ(尋出)一例、●たまふ(給)二例、●つぐ(継)四例、●つたふ(伝)一例、●つつむ(包)一例、●つらぬく(貫)一例、●とる(取)二十四例、●ならぶ(並)一例、●のぶ(延)一例、●はぬ(刎)六例、●ふる(振)二例、●まゐらす(参)一例、●みる(見)四例、●めす(召)五例、●もつ(持)四例、●わたす(渡)八例

龍谷『平家』・「カウベ」(総数十九例)

●うけとる(受取)一例、●うなだる(項垂)二例、●かく(懸)一例、●かたぶ(む)く(傾)三例、●地につく(附)一例、●はぬ(刎)九例、●もつ(持)一例、●わたす(渡)一例

天草『平家』・「クビ」(総数八十七例)

●いる(入)三例、●う(得)一例、●うけとる(受取)一例、●うつ(打)三例、●おくる(送)一例、●おつ(落、「うちおとす」「かきおとす」含)三例、●かく(懸)

九例、●きる(切、「かききる」「ねぢきる」含)十例、●くだす(下)一例、●しづむ(沈)一例、●すつ(捨)一例、●たづねいづ(尋出)一例、●たまはる(賜)一例、●つぐ(継)三例、●つつむ(二例)、●とる(取、「とりあつむ」含)二十二例、●なげいる(投入)一例、●はぬ(刎)九例、●ひく(引)一例、●めす(召)二例、●みる(見、「みしる」含)四例、●もつ(持)二例、●わたす(渡)五例

天草『平家』・「カウベ」(総数六例)

●うづむ(埋)一例、●はぬ(刎)五例

金刀比羅『保元』・「クビ」(総数三十四例)

●いだく(抱)一例、●いる(入)二例、●うちかづく(荷)一例、●うつ(打)四例、●おく(置)一例、●おつ(落)一例、●きる(切、「かききる」「ねぢきる」含)九例、●とる(取)七例、●ならぶ(並)一例、●のす(載)一例、●のぶ(延)三例、●はぬ(刎)一例、●ひつさぐ(提)一例、●もつ(持)一例

金刀比羅『保元』・「カウベ」(総数八例)

●かたむく(傾)一例、●たる(垂)一例、●地につく(附)一例、●はぬ(刎)四例

金刀比羅『平治』・「クビ」(総数二十七例)

●うしなふ(失) 一例、●うつ(打) 四例、●かく(懸) 六例、●きる(切) 二例、●さしおく(差置) 一例、●とる(取) 十例、●のぶ(延) 一例、●もつ(持) 一例、●わたる(渡) 一例

金刀比羅『平治』・「カウベ」(総数四例)

●かく(懸) 一例、●きる(「一例」、●しづむ(「一例」、●はぬ(刎) 一例

土井『太平記』・「クビ」(総数二百二十八例)

●あたふ(与) 一例、●いだす(出) 一例、●う(得) 一例、●うけとる(受取) 一例、●うつ(打、「うちおとす」含) 五例、●おくる(送) 一例、●おつ(落、「かきおとす」含) 十例、●かきつく(書付) 一例、●かく(懸、「かけならぶ」含) 三十例、●きる(切、「かききる」「きりおとす」「きりかく」含) 二十五例、●くひやぶる(喰破) 一例、●くわふ(啞) 二例、●さしあぐ(差上) 六例、●さらす(曝) 三例、●すつ(捨) 一例、●たてまつる(奉) 一例、●つぐ(継) 一例、●つつむ(包、「おしつつむ」含) 二例、●つらぬ(連) 一例、●つらぬく(貫、「さしつらぬく」含) 十三例、●とる(取、「とりならぶ」含) 七十五例、●なく(投、「なげいる」「なげあ

ぐ」含) 六例、●のぶ(延、上・下二段とも) 八例、●のぼる(上) 三例、●はぬ(刎) 十三例、●ひきさぐ(提) 二例、●ほつす(欲) 一例、●まゐらす(参) 一例、●みる(見、「みす」含) 十例、●めす(召) 二例、●もつ(持) 三例、●もとむ(求) 一例、●わたす(渡) 七例、●をる(折) 一例

土井『太平記』・「カウベ」(総数四十五例)

●かたぶく(傾) 八例、●くだける(砕) 二例、●くひやぶる(喰破) 一例、●さらす(曝) 一例、●たる(垂、「うなだる」含) 四例、●地につく(附) 九例、●はぬ(刎) 十四例、●みる(見) 一例、●めぐる(廻) 五例

四

以上の文献からえられたデータによって、『半井本』の十種の例を順に訓んでいく。

まず「首ヲ討ツ」であるが、これは五種の文献すべてが「クビ」と対応しており、ひとつの例外もない。固定的ないまわしであったのだろう。

この「討ツ」と同様の傾向をしめすのが、「落ツ」の例で、そもそも用例自体が存在しない金本『平治』をのぞく四種の文献すべてで「クビ」と対応していて異例がない。いずれも古辞書の傾向にさからって、「クビ」と訓むのが妥当である

う。

逆に「カウベ」の専用とみなしていいとおもうのが、「(地に) 附ク」で、龍谷『平家』、金本『保元』にそれぞれ一例、土井『太平記』に九例「カウベ」のみと対応しており、「クビ」といった例がない。金本『保元』では八例中一例、土井『太平記』では四十五例中九例と使用率もたかく、確実な訓とみとめていいだろう。

ほかの七例はここまで完全に割りきれることはないが、それでも傾向はあり、ほとんどの場合、訓を決定することが可能だとおもう。

ほぼ「クビ」の専用語といつていいのが「切ル」で、金本『平治』にひとつだけ、

保元の合戦に、父の首^{かうべ}を切、平治の今は長田がてにか、つてうたれぬ。(下・金王丸尾張より馳せ上る事)

という例があるのをのぞけば、同書も九例が「クビ」と対応しているのもふくめて、やはり異例はない。

とくに龍谷『平家』では百三十四例中二十四例、金本『保元』でも三十四例中九例と、前者は五分の一弱、後者では四分の一以上を占めており、総数全体に対してしめる割合も非常にたかい。ここまで傾向がはっきりしているのだから、さすがに金本『平治』の一例は例外とみて問題はないだろう。

この「切ル」にちかひのが「懸ク」「持ツ」と「渡ス」の

三種で、さきに「懸ク」をみていくと、龍谷『平家』の、
かばねを山野にさらし、かうべを獄門にかけらる。

(巻第五・朝敵揃)
という一例、そして金本『平治』に、「首^{かうべ}をはねて獄門にかけ」(上・信西の子息尋ねらるる事)とある例以外は、すべて「クビ」と対応している。

もつとも、後者の例は「刎ヌ」が先行する例で、この語は後述するが「カウベ」と対応しやすいので、これを除外すると、例外はひとつしかのこらない。

そして、金本『保元』には用例自体がないのでこれも除外すると、あとはすべて「クビ」と対応している。各文献での用例数もたかく、金本『平治』などは二十七例のうち六例であるから五分の一をこえており、ほぼ確実に「クビ」とみていいだろう。

つぎに「持ツ」であるが、これも龍谷『平家』に、

貞盛・秀郷はつゐに打とて^てげり。其かうべをもたせてのぼる程に、清見が関にてゆきあふたり。

(巻第五・五節之沙汰)
とある一例をのぞくと、龍谷『平家』の四例もふくめて、のこり四種の文献での、すべての例が「クビ」と対応しているから、基本的には「クビ」と訓むべきものであろう。

「渡ス」についても、やはり龍谷『平家』に一例、「カウ

べ」と対応する、

巷にかうべをわたさるゝ今は、あはれみなしますとい

ふ事なし（巻第十・首渡）

をのぞけば、龍谷『平家』八例、土井『太平記』七例がすべて「クビ」と対応している。「切ル」「懸ク」「持ツ」とくらべれば文献数、用例数とも確実性が多少おちるが、「クビ」と訓む蓋然性がたかいだろう。この四種は、すべて古辞書の傾向にさからう方が無難ではないかとおもう。

つぎに五種の文献のうち、複数にみえない例としては「実検ス」「奉ル」のふたつがある。「実検ス」は龍谷『平家』に三例、「クビ」と対応する語としてあるが、ほか四種にはみえず、傍証としてよい。「奉る」についてはさらに薄弱で、二百二十八例とかなりの総数をもつ土井『太平記』の「クビ」のなかに一例あるにすぎない。

前者は三例あり、「カウベ」には例がないので、いいまわしとみとめてもよさそうであるが、後者は偶然とも考えられるところで、確定しがたい。しかし、さきにものべたことではあるが、五種の文献のいずれでも、「クビ」と「カウベ」の比率は、前者が後者を圧倒しており、やはり「クビ」の方が普遍性のたかい語とみとめられる。

それは訓みの判断がしがたい『半井本』でもおなじことで、確実に「クビ」と訓む「頸」が三十一例あるのに対し

て、「クビ」「カウベ」のいずれに訓む可能性もある「首」は二十三例とすくない。しかもすでに検討したとおり、「首」のなかにも「クビ」と訓むべき例はおおい。これだけでも、「クビ」と「カウベ」の比率が前者におおきくかたむくのは明白だろう。

すると軍記物語においては、たしかな例とはほしくとも、確実に「カウベ」と訓む確証がえられない場合には、「首」は古辞書にしたがって「カウベ」と訓むのではなく、「クビ」と訓む方が蓋然性はたかいとおもう。

以上のように考えれば、「実検ス」「奉ル」に対応する「首」も、「クビ」と訓むのが妥当だろう。

最後にのこしたのは「勿ヌ」で、これがもともと問題のおおい語であることは、前掲した語彙一覧によってもあきらかである。現在の語感では「クビを刎ねる」といい、「コウベを刎ねる」とは決していわないが、五種の軍記物語における用例の傾向は、これとはことなる。

| | クビ | カウベ |
|--------|----|-----|
| 龍谷『平家』 | 六例 | 九例 |
| 天草『平家』 | 九例 | 五例 |
| 金本『保元』 | 一例 | 四例 |
| 金本『平治』 | ナシ | 一例 |

土井『太平記』 十三例 十四例

以上のように、金本『平治』で「カウベ」の専用であるのをのぞけば、すべての文献で「クビ」「カウベ」の両方に対応しており、しかも土井『太平記』のように用例数がほぼ拮抗しているもの、天草『平家』のように「クビ」がまさるものもあるから、どちらの訓みも可能であるというほかない。

唯一「カウベ」専用である金本『平治』についても、わずかに一例のみであることを考慮すれば、偶然の可能性も決してひくくない。

他文献から帰納して、訓を決定することはほとんど無理であるが、しいて決めるとすれば、「カウベ」が穏当だろう。

一見してわかることであるが、天草『平家』をのぞけば、わずかながら「カウベ」と対応する例が「クビ」のそれにまさるというのが一点。

もう一点は、「クビ」と「カウベ」の総数の差異で、龍谷『平家』でいえば、「クビ」百三十四例中、「勿ヌ」は六例で、五パーセントにも満たないが、「カウベ」では十九例中九例であり、五割にちかい。「クビ」との対応が一例しかない金本『保元』はいうにおよばないだろう。

数字のうえでは拮抗しているようにみえる土井『太平記』も、「クビ」と「カウベ」の総数が二百二十八対四十五であるので、「カウベ」のおおよそ三分の一が「勿ヌ」と対応し

ているのに対して、「クビ」のそれは六パーセント程度であり、実質的には「カウベ」とのむすびつきの方が強固なのである。

これは数が逆転している天草『平家』でもおなじで、「カウベ」六例のうち、五例までが「勿ヌ」と対応しているのに対して、「クビ」はそうではない。

もちろん、龍谷『平家』の六例や、土井『太平記』の十三例というのは、さきにみた「切ル」の一例のように、看過してよい数ではない。ましてや、天草『平家』のように絶対数でまさる場合にはなおさらで、さきほど「訓を決定することはほとんど無理」とのべたとおりである。

しかし、上記のような考証によれば、確実な附訓のない場合には、「カウベ」と訓んでおく方が無難な態度である、ということとはできるかとおもう。

おわりに

非常に瑣末な問題をとりあつたことになる。しかし、冒頭とおなじく古記録にそくしての発言ではあるが、「私意により恣意的に読み下してしまえば、その國訓は厳格な意味での言語研究の対象とはなり難いと考える」という論理は、おそらく和漢混淆文にも適用されねばならないだろうと考え、『平井本』訓読のための手続きとして、「首」という漢字

の処理を中心として検討をおこなってきた。

その結果として、確実に「カウベ」と訓む例は、「(地に) 附ク」と対応する場合だけで、かなり保留をふくむことになる「勿ヌ」をくわえても、二種にとどまる。むしろ「クビ」と訓む可能性のたかい場合が圧倒的におおい。二十三例中、「カウベ」の確例といえるのは一例のみ、「勿ヌ」をくわえても七例で、「クビ」と訓むべき例がまさる、というのが本稿の結論となる。

古辞書において「首」がほぼ一貫して「カウベ」と訓まれることは対照的であって、作品から帰納できる訓みとのあいだに、かなりの乖離があることがみとめられる。『本文』で「首」の主たる訓を「カウベ」としたことがくやまれるが、この考証をもつて補正としたい。

注

- 一 峰岸明『平安時代古記録の國語學的研究』（東京大学出版会・一九八六）
- 二 坂詰力治ほか『平井本保元物語本文・校異・訓釈編』（笠間書院・二〇一〇）
- 三 半井本『保元物語』の本文は、前掲二による。濁点はわたくしに附した。
- 四 草川昇『五本対照類聚名義抄和訓集成 一〜四』（汲古書院・二〇〇〇〜〇一）

五

- 中田祝夫・峰岸氏『色葉字類抄研究並びに索引』（風間書房・一九六四）
- 木下正俊『伊呂波字類抄国語索引』（私家版・一九五七）
- 三宅ちぐさ『世俗字類抄 天理大学附属天理図書館蔵影印ならびに研究・索引』（翰林書房・一九九八）
- 中田氏・林義雄『古本下学集七種 研究並びに総合索引』（風間書房・一九七二）
- 中田氏『文明本節用集 研究並びに索引』（風間書房・一九七〇）
- 中田氏『古本節用集六種 研究並びに総合索引』（勉誠社・一九七九）
- 中田氏・根上剛士『中世古辞書四首 研究並びに総合索引』（風間書房・一九七二）
- 小島幸枝『笠間索引叢刊55 耶蘇会版落葉集総索引』（笠間書院・一九七八）
- 中田氏・小林祥次郎『書言字考節用 研究並びに索引 改訂新版』（勉誠出版・二〇〇六）
- 以上十種の古辞書索引をさす。以下、文中にこれらの古辞書を引用する場合には、これらの索引本文による。なお、ローマ字表記なので附訓ではないが、土井忠生ほか『邦訳日葡辞書』（岩波書店・一九八〇）にも「クモスキ」「クモズキ」の例はない。
- 栃木孝惟ほか『新日本古典文学大系43 保元物語 平治物語 承久記』（岩名書店・一九八九）のうち、栃木氏校注「保

元物語」をさす。

六 永積安明・島田勇雄『日本古典文学大系31保元物語 平治物語』(岩波書店・一九六四)

七 原文・釈文ともに山中裕編『御堂関白記全註 釈長和二年』(高科書店・一九九七) によった。

八 『類聚名義抄』(観智院本)、『色葉字類抄』(前田本・黒川本)、『古本節用集』(黒本本)では、「サキダツ」に対応する漢字は「先」である。

九 『色葉字類抄』(前田本・黒川本)には、「髻」「髻」、『古本節用集』(易林本)には「理髪」などある。『色葉字類抄』の訓が基本的である。

十 零本ながら最古写本である文保本奥書に、「文保三年」(一三一八年)とあるから、これ以前であることは確実である。弓削繁『六代勝事記と保元物語』(『六代勝事記の成立と展開』風間書房・二〇〇三、初出一九八二)の説にしたがって、十三世紀前半とみた。

十一 築島裕『訓點語彙集成一〜八』(汲古書院・二〇〇七)〇九

十二 金田一京助ほか『日本古典文学大系32平家物語上』(同33平家物語下) (岩波書店・一九五九)一六〇。ただし、同書の凡例にあるとおり、訓は高良神社本訓を使用しているから、ただししくは高良本『平家』というべきかもしれないが、便宜上、龍谷大学蔵本とする。用例の検索は、金田一氏ほか『平家物語総索引』(学習研究社・一九七三)によ

った。

十三 佐佐木信綱ほか『校本萬葉集 新增補版三』、『同十二』(岩波書店・一九七九、八〇)、『同別冊二』(岩波書店・一九九四) による。

十四 築島氏『訓點語彙集成 別巻 漢字索引』(汲古書院・二〇〇九)

十五 十二世紀前半の最明寺本『往生要集』にみえる(『訓點語彙集成』から、軍記作品に先行する。

十六 馬淵和夫・深野浩史『笠間索引叢刊82中華若木詩抄巻之中文節索引』(笠間書院・一九八六) による。

十七 「首」という漢字表記自体は二十四例あるが、下巻四十丁ウ九の「一首」は「イツシユ」であり、あきらかに「クビ」とも「カウベ」とも訓まない例であるので、検討からはずした。

十八 本文は前掲六『保元物語 平治物語』のうち「保元物語」により、用例の検索は坂詰氏・見野久幸『保元物語総索引』(武蔵野書院・一九八二) によった。

十九 もちろん、厳密に訓まれることなどそもそも期待していない文献であるから、無訓本なのだとも考えうる。小松英雄の「御」の訓みについての発言(『日本語書記史原論(補訂版) 新装版』笠間書院・二〇〇六、原版一九九八)がおもしろい。しかし、『半井本』には、「山林シ」(中三十一ウ五)のように、「サンリン」でなく「ヤマハヤシ」と訓みを特定するためかとおもう捨てがなの例も

き、主査・副査もお願いした。さらには編著にかかわる機会までも頂戴し、学恩は筆舌に尽くしがたい。もとよりこのような短文で礼を尽くせるはずもないが、多年のご指導に深謝申し上げます。

あり、全然厳密な訓みを期待していなかったともかぎらない感がある。また、かりに『半井本』に訓みの意識がなかったとして、それを他文献の訓みと比較することで、適切な訓みを留意しておくことは、意義のないことではないだろう。

二十 活用については区別せず、すべて（ ）のなかに終止形の形で統一した。また『半井本』の表記は一定ではないが、活用語の表記はもともと一般的と判断したものにまとめた。

二十一 江口正弘『天草版平家物語対照本文及び総索引 本文篇』『同索引篇』（明治書院・一九八六）による。

二十二 坂詰氏・見野氏『平治物語総索引』（武蔵野書院・一九七九）による。

二十三 西端幸雄『土井本太平記 本文及び語彙索引』（勉誠社・一九九七）による。

二十四 この「総数」は基本的に活用語と接続する「クビ」の用例数であるので、龍谷『平家』の全用例とひとしくない。以下の「クビ」「カウベ」の総数もこれにおなじ。

二十五 前掲一、峰岸氏『平安時代古記録の國語學的研究』の「序」。

追記

今年度をもって、坂詰力治先生がご退職される。大学院博士前期課程二年から今年度まで、六年にわたって演習に参加させていただ